

伝統芸能

を楽しむ

ダイナミックに未来へ挑戦



評

日本舞踊協会

主催の第一回

「日本舞踊 未

来座一賽(SA

I)一(六月

十五〜十八日、東京・国立

小劇場)は四日間で計九

回、「水」にまつわる四作

品を上演した。

同協会の主催公演として

は、三年ぶりに新作をそろ

えた。価値観の多様化が進

む現代において、日本舞踊

を未来に向けブランド化さ

せていく一つの方法とし

「日本舞踊 未来座一賽(SA I)一」

て、新作に挑むことは、こ
れからの指針を示す意味で
重要な試みだ。

中でも、俚奏楽「女人角

田くたゆたふ」(振付・

橘芳慧、構成・織田紘二、

作曲・本條秀太郎)は、隅

田川にちなんだ四つの物語

を、五人の女性舞踊家(尾

上紫、花柳貴代人、藤蔭静

枝、藤間恵都子、水木佑

歌)が幻想的に描いた。ま

るでポートレートのような

美しい舞台に映える五人そ

れぞれの舞踊が、どこかノ



「掬くすぐり」の一場面
から (日本舞踊協会提供)

スタルジックな風情さえ醸
し出し、四景とも豊かな表
現力が際立っていた。

「掬くすぐり」(演

出・市川染五郎、振付・松

本錦升一染五郎、音楽・仙
波清彦)は、男女八人の舞
踊家(尾上紫、西川扇左衛

門、花柳幸舞音、花柳輔

蔵、花柳楽人、松本錦升、

若柳延祐、若柳竜公)によ

り、音楽と舞踊の調和にこ

だわりながら、既存の振り

付け法をいい意味で裏切る

大胆な発想だ。

「水」を独自の視点で解

釈し、リズムを捉えたダイ

ナミックな動作は、まさに

「日本舞踊におけるコンテ

ンポラリーダンス」にふさ

わしい可能性を感じた。

(小林直弥一日本大芸術学

部教授)